日常　－涼風 優莉の場合－

悠月　香夏子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
日常　ー涼風　優莉の場合ー

【Ｎコード】
Ｎ３２５６Ｕ

【作者名】
悠月　香夏子

【あらすじ】
先輩にしてるボクの恋は、
神様の気まぐれによって
とんでもない方向にいくのでした。
それが、私の『日常』。

日常１　『先輩と私。』

ボクは、先輩に恋をしています。
部活の先輩。
メガネで、Ｓで、折り紙ばっか折ってるけど
本当は優しい先輩。
ボクの事なんか眼中に無いって分かってるけど……。

この物語は、そんな私達の非日常的ラブコメです。

「あ、優莉ちゃんだ。おはよ～」
……のんきに手を振ってくる彼が、ボクの好きな人。
「おはようございます、ゆっきー先輩。」

彼の名前は浅羽（あさばゆきむら）幸村。あだ名はゆっきー。
一個上で、いまいち何考えてるかつかめない人だけど
ボクは、大好き。

「そういえばさ、優莉ちゃん給食委員でしょ？」
「あ、はい！！」
「俺が委員長でびっくりしたでしょ」
「はい、とっても」

こんなやって、ボク達は『ゆるゆる会話』ばっかやってる。
恋に発展するわけがない。
あ、ボクの紹介がまだでした。

ボクの名前は涼風（すずかぜ）優莉（ゆうり）。
１４歳、中学２年生。所謂ボクっ娘で、だぜっ娘で、

ヤンデレで、妹のカオスな性格。
演劇部所属。
　ちなみにゆっきー先輩と知り合ったのは演劇部のおかげ。
これだけは、運命に感謝するとしますか。

「それじゃ、またあとで。」
「はい、それでは！！」
……ボクに勇気がないのが悪い。

「これからどうしよっかなー」

のんきなのも今のうちだ。

日常1　『先輩と私。』（後書き）

私としては二作目になる新作恋愛小説やっと書けました！！！
またしても先輩との恋です。
恋愛は楽しいなッッ（笑）

読んでいただけたら幸いです。

日常2　『急展開』

ある晴れた日の夕方、衝撃の報告がボクの耳に入った。

「離婚した。
お前達は俺とあいつの好きなほうについて行けばいい。」

……はい？離婚？
あ～、離婚ってあれ？円満だった夫婦があるきっかけで
別れてしまうこと。

……なにやってんのこの人達。
最近一緒にいないなぁとか思ってたらなるほどね、離婚か。
好きなほうについて行けって事は親権は剥奪されてなかったって事
ね。
詳しくは分からないけど。

ボクは迷わず父を選んだ。
しかし、この選択が後に大きな不幸（幸福）を
運んでくる事をボクはまだ知らない。

日常２　『急展開』（後書き）

まさかの展開でしたが（笑）
承的には早かったですね←

お読みいただきありがとうございました。

６月２４日　悠月　香夏子

日常3　『引越し』

「おい、優莉。」
「……なに？」
「明日、引っ越すぞ。」
「引っ越すって……どこに？」
「俺の不倫相手の家。」
――――……何やってんだよこの人。
離婚の原因不倫！？　しかもお父さん！？
「とにかく、明日だ。荷物まとめておけよ。」
「……うん。」
――――えーっと……　なにこれ？ゲーム？

＊＊＊
……原因は不倫か。あー、もう。ちょっと泣きそうだよッッ！！
「明日引越しか～。もうちょっと詳しく聞いておけばよかった。」
不倫相手にも子供とかいるのかな。
同じくらいだったらいいなぁ。ついでにいうと女の子で。
本当の兄弟、全員男だったし。
「まぁいいや。いろいろ考えたって明日になれば分かるんだから、さっさと寝ちゃおーっと。」
パチリ。
電気を消して、ボクはすぐに寝てしまいました。
いろいろありすぎて疲れていたから……。
明日になったらボクの全てが変わってしまうのに。
穏やかで平和な日常は、今日まで。

日常３　『引越し』（後書き）

引越しです。
この後の展開はまぁご想像に（笑）
結構短いですね、私の小説って。
次は長めに書いてみるぞ！！

６月２４日　悠月　香夏子

日常４　『顔合わせ』

「準備できたかー？」
「う、うん。多分平気。」
「忘れ物しても取りに来れないからな。」
「げッ。何それ。」
「とにかく、早く行くぞ。」
「はいはい……。」

何も知らずにつれて来られた場所は、
３階建てのマンションだった。
お父さんが邪魔で苗字が見えない……。
１０３号室の前で止まり、インターホンを押してみた。
可愛らしい女の人の声。
――――どんな人なんだろう……。
ガチャ。
扉が開く。出てきたのは……。
見た目２０代後半くらいの若い女の人だった。
黒髪で目がくりくりしていて、一言で言うならば「可愛い」が似合うのだろう。
ボクとは正反対だ。
「あら？あなた。そちらの可愛いお嬢さんは？」
「俺の娘だ。」
「そう。今日からよろしくね。えーっと、名前は……。」
「優莉です。涼風　優莉。」
「優莉ちゃんか。よろしくね。」
「あ、はい……。」
「とりあえず家の中へ入って。どうぞ。」
意外とファンシーな内装だった。

いたるところに可愛い人形が置かれており、写真も飾ってあった。
通されたのはリビングだった。
座ってどうぞと言われたテーブルの上には、
ダイニングと兼用しているのか台ふきんとサラダが置いてある。
きっと片付けでもしていたのだろう。
「あら、ごめんなさいね。さっき朝食を食べていたから……。」
少し照れた様子でテーブルを片付け始めた。
コップに麦茶を注ぎいれて前に置いてくれた。
(飲む気には早々なれなかったが)
彼女が椅子に座ったので私は聞いてみた。
「ねぇ、あの…、あなたの事なんて呼べばいいのですか?」
「そんな、いいのよ。気を使わなくて。家族なんだから。」

『家族』

彼女から軽薄に告げられたたった一言の単語が
頭から離れなくなった。
――――家族になるの?そりゃ、そうだよね。分かってた。
「イキナリ『お母さん』は気がひけるから、名前でもいい…のかな?」
「え、えぇ。私は智恵子です。」
「じゃあ、智恵子さんだ。よろしく。私はなんて呼んでもいいから。」
「分かったわ。そういえばね、私にも中3の息子がいるんだけど、
今日はどこか出かけてるみたいだから、後で紹介するわね。」
「分かりました。」
智恵子さん、か。
イキナリお母さんはさすがに言えないなぁ。
素性不明だし。よく分からないし。
中3の息子か。じゃあお兄ちゃん?

私にも血が繋がっていないとは言えお兄ちゃんができるのかぁ！！
「智恵子、優莉を部屋までつれてってあげてくれ。」
「はいはい。優莉ちゃん、こっちおいで。」
「？」
「あなたのお兄ちゃんと一緒の部屋なんだけど、
そんなに狭くはないし充分でしょう。」
つれて来られた部屋は、なんとも言えない部屋だった。
白い壁に白い床。小さいテーブルが中央に置かれ、
端っこには白いベッド。ダブルくらいの大きさ？
「この部屋を、中３の人と……？」
「えぇ、そう。今は白を基調の家具を置いているけど、
そろそろ変えようと思っていたところだから、
優莉ちゃんも欲しい家具が合ったら言ってね。息子と話し合う必要
があるけど……。
それと、ベッドは２つも置けないから二人で一緒に寝てね。」
「分かりました。」
――――え、二人で寝る！？
ちょうどそこへ荷物が届いた。
自分の荷物を整理しながら中３の人の事を考えていた。
――――どんな人だろ。話があう人ならだれでもいいや……。

＊＊＊

「そういや今日誰か来るんだっけな。母さんからは
早く帰ってこいって言われたし、さっさと帰るか。」
え、お兄ちゃん？

日常４　『顔合わせ』（後書き）

次回、お兄ちゃんが来ますよ！！！
ぜひとも楽しみにしていてくださいませ。

６月２５日　悠月　香夏子

日常5　『幸村君の視点。』

俺は朝から騒がしい母さんを横目に朝食をとっていた。
コンソメスープを飲もうとカップを口に運んでいる最中に
母さんが「今日は家族が増えるよ～。」と言っていた。
父さんが家を出て行ってからもう3年になる。
俺が小6の時、夜中に水を飲みに行こうとしたときに
遭遇してしまった。
父さんと母さんが喧嘩をしているところに。
最初は口喧嘩くらいだったのだが、
次第に大声になってあたりの静寂は消えるほどだった。
ところどころ聞こえる声には、
恐ろしい言葉ばかりだった。
俺はのどが渇いていたことも忘れただただ呆然と立ち尽くしていた。
――――幸せだと思っていたのに。
そのうち、父さんはここぞとばかりに棚からキャリーバッグを持って
家を出て行ってしまった。
泣きじゃくれる母さんを初めて見た。
――――俺はあの時動けなかったんだよな。
母さんは俺が見ていたとも知らずに父さんは出張に出かけたと言った。
あの日から、孤独を感じるようになった。
真っ暗で一人ぼっちな感覚が……。
そんな事を考えながら俺は家へ帰る。
母さんの言っていた「新しい家族」に少しばかりの期待を寄せていた。
俺を孤独から救い出してくれるんじゃないかって。

ガチャリ
扉を開けて、玄関へ入る。
そこにいたのは……。
「優莉ちゃん？」「先輩？」

日常5　『幸村君の視点。』（後書き）

どうでしたかね～？
やっぱりかっていう読者の方が多いのではないのでしょうか（笑）
次当たりでごちゃごちゃなっていきます。
よろしくお願いします。

6月27日　悠月　香夏子

日常6　『驚きと戸惑い。』

確かに、それはゆっきー先輩だった。
細い黒ぶちのメガネ、見ていて飽きない顔、優しい眼差し……。
それをとっても、確かにゆっきー先輩だった。
「どうしてここに？」
「どうしてって……ここ、俺ん家。」
「えぇ！！」
私は、神様に遊ばれているのだろうか？
こんな変な偶然、そうとしか思えない。
＊＊＊
「あら、帰ってきてたの。」
「うん、ただいま。」
「そういえばね、今日からここに住む…」
――――いやあああ！！！
二人が話しているのが見える。
パニック状態の私をよそに、目の前に来たその人がいた。
「涼風優莉ちゃんよ。」
「ああ、知ってる、俺の後輩。」
「えっと…よろしくお願いします。」
「さて、全員揃ったところで夕食にしましょうか。」
智恵子さんはそう言って夕食の支度を始めた。
神様、ボクはいったいどうすればいいのでしょうか？

日常7　『気まずい夕食。』

新しい『家族』との初めての食事は一言で言って、
き、気まずい……。
空気で人が殺せると心底思ったくらいに。
――どうしよう。ご飯の味がわからない…。
智恵子さんと父さんは楽しそうに話している。
ボクとゆっきー先輩は黙々と夕食を食べた。
「もういいや。ごちそうさま。」
「あら、優莉ちゃん、もういいの？」
「いい。美味しかったよ。もうお風呂入って寝ます。」
「そう…、わかったわ。幸村、案内してあげて。」
「…おう。」
――ゆ、ゆゆゆ、ゆっきー先輩！？
どうしよう。ボクってば、この人のこと好きなんだよ？！
「優莉ちゃん、こっちだよー。」
「は、はい！！！」
あーあ、声が裏返っちゃった。

日常8　『二人きりの夜。』

「優莉ちゃん、こっちおいで。」
「は、はい…。」
若干緊張しつつもゆっきー先輩の後をついて行く。
———大きい背中だな…。
「はい、ここ。
タオルとかは入ってるから、好きに使ってね。
それじゃ。」
「わかりました!!!」
「おー、いい返事。」
そう言って先輩は私の頭をなでた。
「///!!」
———…びっくりした…。
頭なんて部活でなでられたりしてるのに。
いつもと違うドキドキなのは、きっとこの場所が先輩の家だから。
そして、ボクと先輩はもう?家族?だから……。
「家族、か。」
ゆったりとした湯船に肩まで浸かりながら
ボクは考えていた。
ここ数日の出来事を。
離婚が成立して、ここに引っ越してきて、
ゆっきー先輩と同じだとわかって、ボクの生活は一変した。
「ふふっ、とんでもない偶然だな。」
ぼそっと呟いてからお風呂を出た。

＊＊＊

お風呂から上がると、テーブルは綺麗に片付いていた。

「あら、お風呂上がったの？
じゃあ次、私が入ろうかな。」
「はい、どうぞ。」
適当に返事をした後、ボクはついに兄妹の部屋へ入った。
「ああ、お風呂上がったの。」
「は、はい…。」
「ところで、さぁ。
優莉ちゃん、どっちで寝る？」
「え？」
「いや、だからさ、床で寝るか、ベッドで寝るか。」
「ああ、そうですよねぇ。ボクは…床でいいですよ。」
――――いじめか！！！
さすがに先輩相手でベッドには寝られない。
でも床か…。痛そうだな。
「ああ、そう？
一緒に寝てもよかったのに。」
いたずらっぽい笑顔でそう言われた。
「ええ？！」
「冗談だよ。じゃあ、もう寝ようか。
明日も早いよ～。」
「ああ、はい。そうですよね。」
「うん。それじゃ…あ、もう一つ言わないといけないことがあった。」
「……？」
「呼び名、ゆっきー先輩だとなんか居心地悪いから、
ほかの名前で呼んで？俺は優莉って呼ぶからさ。」
？優莉？って初めて呼ばれて、心がくすぐったい……。
「ええーっと…にーさま。にーさまがいい。」
「にーさまか…まあいいかな？じゃあそれで。」
この呼び名は、ボクがハマっている？神の巫女知る世界？の巫

女が
主人公を呼ぶときの名前。
「じゃ、おやすみ、優莉。」
「あ、はい！！おやすみなさい、にーさま…。」
……なんて幸せなんだ。

日常８　『二人きりの夜。』（後書き）

お久しぶりです！！！
悠月　香夏子です。
日常、まだまだ続きます！！！
次回をお楽しみに…。

１１月０４日　悠月　香夏子

日常9　『夜、兄弟の部屋にて。』

夜とは、いろいろ思い悩む時間である。
どこかの偉い人はそう言った…気がする。

「…にーさまー？」
「んー…」
「起きてますか？」
「…若干起きてるー、うう…」
秒針のうるさい時計は１１時３０分をさしていた。
ボクは、とんでもない状況にどぎまぎしていた。
――――どうしよう、寝れない…。
こんなに大好きな人と同じ空間で寝ているのだ。
今までにない速さで脈打つ鼓動。
自然と息が上手に出来なくなる。
――――緊張、かな？
不思議な状況にいるからこそ、
ボクが普段言えないような事を
言えたのかもしれない。

「に、にーさまー。」
「今度はなに？」
ボクはゆらりと身体を起こすと、小さめの声で言った。

「あ、あの、床で寝てると痛いので…その…
一緒に寝てもいいですか？」
時がピタッと止まる。
一瞬、自分が何を言っているのかわからなくなった。
うるさかった秒針の音さえ聞こえない。

自分のありえない行動にわたわたしていると、
にーさまの方からポツリと返答が聞こえた。

「…いいよ、おいで。」
いつもとは少しだけ違う、甘く力強い声でボクを呼んだ。
「えっ！！」
「え？」
「え、ええと、その…いいんですか？」
「…何する気ですか、悠莉さん。」
「い、いえ…えっと…。」
返答に困っていると、にーさまはクスリと笑って
手招きした。
「いいよって。床はさすがに酷だろ。」
「ああ…ですよね、では、遠慮なく。」
冷静なフリをしていても、足が震える。
改めてまじまじとベッドを見た。
明らかに二人用ではない大きさ。
――――言い出したのはボクだし、今更悩んでも仕方ない。

ボクはいそいそとベッドへ入ると、素早く丸くなった。
悠莉は、自分の体温が火傷するほど熱くなるのを感じた。
「いい？それじゃ、おやすみ。」
さっきまでとは桁違いに加速する鼓動。
こんなに緊張してるのに、
身体の暴走は止められそうにないのに、
何故か安心した。
――――にーさま、温かいな…。
そんな事を考えてるうちに、ボクは深い眠りへと落ちていった。

日常９　『夜、兄弟の部屋にて。』（後書き）

夜は長いです。
本当に長い。
少しだけ積極的になれた悠莉ちゃんのお話でした。

１２月１８日　悠月　香夏子。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3256u/

日常　－涼風 優莉の場合－

2011年12月18日02時56分発行